第２５話　和気清麻呂

仏教が盛んになって、多くの名僧が出たと共に、稀には悪い考えを懐いた僧も出た。弓削道鏡などはそれです。 幸い、和気清麻呂という大忠臣が現われて、尊い国体を護って疵をつけさせなかった。

名僧行基

僧の**行基**が大仏建立の時に大いに力を尽くしたことは前にも述べましたが、彼にはその外にまだ世の中の利益を図ったことが非常に多かったのです。　**行基**は和泉(大阪府南部)の国の人で、15 歳の時から出家となり、興福寺の**義淵僧正**という、その頃日本で一番えらい坊さんに就いて教えを受けた。　子供の時から人にすぐれて賢かった上に、一生懸命に修業を積み、学問に励んだので、後には並ぶ者もいないほどの名僧となりました。

彼が一度説教に出ると、それを聞こうとして集まって来る者が非常に多く、村から村へ、町から町へと**行基**が場所を変えるにつれて、人々はぞろぞろと群をなして従って行くという有様でした。　時の人は皆、生仏さまといって彼を敬い尊んだが、これは、難しい教えをよく分るように説いて聞かせてくれると共に、その行く先々で、橋をかけ、道をなおし、船着場をこしらえなどして交通の便を開いたり、堤を築き、池や溝を掘って、洪水や旱魃に備えてくれたりしたからでした。

行基が一度仕事に手をつけると、忽ち八方から、われもわれもと彼の徳を慕っているものが集まってきて、これを助けたので、どんな工事でも容易に出来上がったということです。　淀川の山崎橋、木津川の泉橋、摂津の昆陽の池、難波の橋、播磨から摂津の海岸に作った五つの港などは殊に有名です。

彼はまた、行く先々で先づ寺を建てて仏教を弘めるという風にしたので、畿内だけでもその建てた寺は４９に及んだ。　全国ではさぞ大変な数に上ったことであったでしょう。　今日、諸国に行基の開いた寺と称するものが多いのも不思議はない。　大仏建立のために諸国を説いてまわったのは、彼が既に 70 歳かの時です。　その功がいかにも大きかったので、**聖武天皇**は大僧正の号を賜ったが、大仏がまだ出来上がらない前に、彼は 82 歳で死んでしまいました。　日本で大僧正の号を賜ったのはこの**行基**が最初であります。

その他の名僧

その頃の名僧としては、この**行基**の外に、**玄昉**、**良弁**、**鑑真**などという人々がいました。　**玄昉**は若い頃に留学僧となって、唐で 19 年間も学問を励み、**真備**と共に帰朝してから、大いに**聖武天皇**のご信任を得て政治にもあづかりました。　**行基**が諸国をまわって人々に仏の道を説いたのに対して、彼は都でその知識を政治の上に応用したのであります。　**良弁**は、もとは**行基**や**玄昉**と同じく**義淵僧正**の弟子であって、宗派も同じく法相宗でしたが、後に華厳宗の一派を開き、**行基**と共に東大寺の建立に力を尽くした。　**鑑真**は唐から来て、律宗の一派を開いた名僧です。　前にも述べておいたがその建築のすぐれ

たことで有名な唐招提寺は、彼が建てた寺です。

上の法相、華厳、律の三宗の外に、奈良時代には三論宗、成実宗、倶舎宗の三宗がありました。これらの宗派を後の世に総称して古京の六宗といっています。

恵美押勝

こういう風に仏教が盛んで、名僧が頻りに出づると共に、僧侶が一般に尊敬され、政治にも与るようなことになったために、ついに第48代**称徳天皇**の御代に、思いもかけない一つの事が起きました。

これより先き、第46代**孝謙天皇（女帝）**の御代に、**不比等**の孫の**藤原仲麻呂**は、才学に富んで、政治の事にも明るかったので、天皇のご信任が厚く、**恵美押勝**という姓名をさえ賜り、一時は非常に勢力を振るった。　しかし、第47代**淳仁天皇**の御代に無理にも自分のわがままを通そうとして、近江に走って兵を挙げたために、忽ち誅せられた。　此の時、**吉備真備**が官軍にすぐれた軍略を授けたことは前に述べました。

この**押勝**の乱の事から、天皇は、それが平らぐと直に位をお去りになって、**孝謙上皇**が再び御位に即かれた。　これを第48代**称徳天皇**と申し上げます（訳注：重祚　天皇が再び位に即くこと）。　**天皇**は御父**聖武天皇**と同じく、篤く仏教をお信じになって、**孝謙天皇**と申した時に、例の大仏の開眼供養にも臨まれたくらいですから、その後も親しく僧や尼を宮殿にお召しになって、仏の教えをお聴きになったこともたびたびでした。

道鏡の信任

その頃、**弓削道鏡**という僧がいた。　河内（大阪府）の国の弓削の生まれで、**行基**や**玄昉**と同じく、興福寺の**義淵僧正**の弟子でしたが、若い時分からよく学問もし、修業も積んで、殊に仏の教えを説くことの上手なのが評判でありました。　**称徳**天皇が未だ**孝謙**上皇でした時に、たまたまご病気に罹られ、彼の看病でお癒りになったことがあったために、その後は深く信用され、**称徳天皇**となられてからは、政治の事にも与からせて、太政大臣禅師の位を授けて、朝廷の文武百官の上に立たせました。

それでもなお不足とおぼしめしてか、間もなく法王の位をお授けになり、その下に法臣、法参議、大律師などという僧侶の役人をおかれて、およそ天下の政治は悉く**道鏡**の指図を受けるようになされた。その上、多くの土地を賜り、その一族の者をそれぞれ高い官にお任じになったから、彼の勢いは非常なもので、もとより天下に並ぶ者など一人も無いようになりました。

法王となって後の**道鏡**は、衣服から食物、出入の乗物や行列なども、悉く**天皇**と同じにするというように、身の程を弁えない驕りを極めていた。　何分にも**天皇**の信任が厚く、その威勢が強いために、心では密かに**道鏡を**憎んでいても、誰一人として表立ってこれを責める者はなく、却って大臣以下の百官などは、法王殿に参って、**道鏡**を拝賀するというような有様であったりした。　何という情けないことでありましたでしょう。

阿曾麻呂、道鏡に諂う

既に上の者が斯ういう状態でしたので、心の正しくない者が**道鏡**に媚び諂って、何かのお蔭を蒙ろうとするのに不思議はありません。　ここに九州の大宰府の主神に**習宜阿曾麻呂**という者がいた。　**道鏡**に媚びて、「宇佐八幡のお告げでありますが、**道鏡**を天皇の位に即かしめたならば、天下は必ずよく治まるであろう、という事でございます」と朝廷に申出た。

これを聞いた**道鏡**は躍り上がらんばかりに喜んだ。　勿論、**道鏡**とても初めは天皇の位に即こうなどとは考えてもいなかっただろうが、**天皇**のご信任が加わるにつれて、だんだんと増長して、ついにこの**阿曾麻呂**の言葉までも信じるようになったのでしょう。

清麻呂、天皇に召される

しかし、**天皇**は非常にお迷いになった。　いくらご信用になっている**道鏡**であるとはいえ、わが国は、大昔の神代に国の始まった時から、君臣の分が定まっていて、天皇の御位は、**天照大神**の御直系でなければ承けられないこととなっているのに、どうして宇佐八幡宮がかようなお告げを下されたのか？

天皇もさすがに不審におぼしめして、深く御心を悩まし給うていたが、ある日、**和気清麻呂**を召されて、「昨夜、夢に八幡のお使いが現れて、『八幡の大神から特に朝廷にお告げしたいことがある。　**法均尼**を遣わすように』とのことであったが、**法均尼**は弱い女の身であるから、長い旅をして若し体を悪くするといけない。　お前が代わって行って、大神の仰せを承って参るように」とお命じになった。　**法均尼**というのは、**清麻呂**の姉で、前には**和気広蟲**といいましたが、今は尼となって大尼の位を頂き、**大尼法均**といっていたのです。

和気清麻呂は備前（岡山県東南部）の人で、16歳の時から姉の**広蟲**と共に朝廷に仕え、その頃は年は37で、位は従五位下に進み、官は近衛将監といって、皇居を守る近衛府の上から四番目の役でした。官も位もそう高くもなかったのに、この大事なお使いを命ぜられたのですから、彼としては名誉なことでしたが、また、日頃からいかに彼が正直で忠義なのが評判になっていたかも分かります。

道鏡、清麻呂を嚇す

さていよいよ**清麻呂**が宇佐（大分県北部）に向かって出発することとなると、**道鏡**は密かに御殿の一室に彼を呼んで、言葉もやさしく

「今度、八幡の大神が使いを遣わせよと仰せられたのは、この**道鏡**を天皇の位に即かしめようとおぼしめしたからのことだ。　お前がその通りのお告げを受けて来れば、直ぐに大臣にしてやる。　その辺をよく考えて、**道鏡**の為にもなり、お前の為にもなるようにせよ。　よいか、**清麻呂**、分かったか？」

といいましたが、**清麻呂**はただ黙って頭を下げているばかりでありました。　すると、**道鏡**は俄かに声を荒らげて、「なぜ返事をしない？　若し間違ったお告げを受けて来れば、帰り次第に貴様の命はないのだぞ！　よいか、**清麻呂**？」と眼をいからし、剱に手をかけて脅しつけた。

けれども、忠義のこころに燃えた武人である**清麻呂**の事でありますので、自分の出世や利益のために心を変えるようなことをしよう筈がありません。　「ともかくも、大神のお告げのままを承って参りま

す」と、彼はきっぱりといって、顔色も変えずに、落ち着き払って**道鏡**の前から下がって来ました。

こうして**清麻呂**をすかしたり脅かしたりしたのを見ると、**道鏡**も**阿曾麻呂**の申出た宇佐八幡宮のお告げというものを本当だとは思っていなかったことが分かります。　それにも拘らず、一僧侶の分際でありながら、天皇の御位を侵そうとしたことを思いますと、実に不埒な、身の程を知らぬ馬鹿者であったといわなければなりません。

清麻呂が御殿を下がって、悠々と自分の家の方へ帰って来ますと、道で**路豊永**という人に行き逢いました。　**豊永**は、もと**道鏡**の師であった人であります。　彼は**清麻呂**に、「**道鏡**が若し天皇の位に登ったら、われわれは何の面目があってその臣下となどなれようぞ！　この世を遁れて、どこかの山にでも隠れる外はない」といった。　**清麻呂**はこの人の言葉にいよいよ決心を固めて、奈良の都を出発した。

清麻呂の忠誠

宇佐に着くと、彼は身を清めて、八幡の神前に額づきました。既に自分の身の事などは全く棄てて、一づに国の為のみを思っている彼れの心は、神々しいまでに尊いものとなって神の御心に通じたことでありましたでしょう。

一心になって暫く念じていると、忽ち八幡の神の御声が高く、はっきりと彼の耳に聞こえて来た。　この時、大神は彼の前に形を現わされたが、その長さは三丈許りで、色は満月のようでもあったということです。　**清麻呂**は大神のお告げを受けると、ほっと安心して我にかえっていた。彼は余りのありがたさに嬉し涙に咽びながら、幾たびも伏し拝んでから神前を立ち上がった。

大分　　宇佐八幡のお告げを受ける和気清麻呂

帰りの旅を彼は急ぎました。　神のお告げを深く胸の奥に収めて、元気よく都に戻ると、彼は直に朝廷に参って、奏上した。　彼は厳かに口を開きました。

「わが国は開闢以来、君と臣との分が定まっている。臣を以って君とするということは決してあるべきではない。　天皇には必ず**天照大神**の御直系の方を立てよ。　道に外れた事を望む者は速やかにこれを掃い除け、という八幡の大神のお告げであります。」

清麻呂流される

誰憚るところもなく、堂々と**清麻呂**が斯う述べて来ると、当ての外れた**道鏡**はみるみる真赤になって大いに怒り、「こいつ、八幡のお告げを偽って奏上しおる、不届き者め！」と怒鳴り、やがて**清麻呂**の官位を奪い、名も**別部穢麻呂**と改めて大隈の国（鹿児島県）に流すことにした。　しかし**清麻呂**は、もとより命を棄ててかゝったことですから、これくらいの事には少しも驚かずに、付添う役人共に送られて、都を立ちました。

幾日か前には、天皇の使いとして、八幡の神のお告げを承って戻ってきたその同じ道を、今日は罪人となって送られて行くのです。　**清麻呂**の心は淋しくもあったでしょうが、正しい神のお告げを奏上して、不埒至極な**道鏡**の悪心を挫いた上のことでありますから、私かに満足していたことででしょう。

清麻呂の一行が、彼を乗せた駕籠を真中にして護りながら、道を急いで、摂津の国の、とある松原に差しかかった時、俄かに後ろの方から大勢の者が駆けつけて来た。

「**道鏡**さまのご命令だ！　**清麻呂**の命を貰いに来たぞ！」

その者共は口々に斯う叫んで、いきなり刀を抜いて切りつけて来た。　**清麻呂**も驚いたが、付添いの役人共も驚きました。　大隈の国まで送りつけるようにと言いつけられて来ている大事な罪人であるのに、むやみに途中で殺さしてしまっては自分達の落度にならぬとも限らないからです。

しかし、更に一層驚いたのは、**清麻呂**に事えて、大隈の国まで一緒に下って行こうとしている彼の家来共です。　彼らは役人共のようにぐづぐづしてはいませんでした。　咄嗟に刀を抜き連れて、主人の駕籠の周囲に立って、敵を近寄らせまいとした。

しかし、**道鏡**の手下の者らは、多勢の事でありますから、「何の小癪な！」といわんばかりに、どっと喚いて斬り込んで来ました。　と、その途端に、突然、天地も砕けるような大きな音がして、雷が**道鏡**の手下の者らの上に落ちました。　「あっ！」と叫んで、二三人の者は倒れたが、その余の者は、そんな事に頓着せずに、なおも**清麻呂**の駕籠を目がけて突き進みました。

ところが、何という凄まじい天気の変わりようでしたでしょう！　此時、忽ち空は真暗となり、電は光り、雷は鳴りはためき、雨も大河を逆さまにしたように降って来た。　多勢を恃んだ悪者共も、この大雷雨の中では、さすがにいかんともする事が出来なかったので、耳を蔽い、頭をかかえて、その歇むのを待っていました。

その時、遥か遠く、うしろの方から早馬を走らせて来る者がありましたが、それが近づくと共に、不思議や、電も、雷も雨もおさまって、日が赤々と照り出した。

「**清麻呂**を殺してはならぬ！」　馬上の者は先づ厳かに斯う言って、静かに馬をとどめた。　これは

都の天皇からのお使いでした。　天皇は、**道鏡**が途中で清麻呂を殺させようとしたのを後で知られて、急いで助命の勅使をお立てになられたのでした。

百川の義気

斯うして**清麻呂**は危うく難を免れて、そこを出発したが、それからは道中何事もなく大隈の国に着きました。　其処では、もとより流人のことでありますから、淋しい月日を送った事でしたでしょうが、その中でも、常に皇室のご繁栄を祈り、国家の安泰を念じていたということです。　その美しい、忠義の深い心に感じて、**藤原百川**という者が、常に不自由のないだけの物を彼の許に送り届けていたということも、一つの美談として伝えられています。

清麻呂が流された時に、姉の**法均尼**も尼の位を剥いで俗人にかえらせられ、**和気広蟲**という名を**別部狭蟲**と改めて、備後の国（広島県東部）に流された。　**法均尼**も弟の**清麻呂**と同じように、忠義の心が厚く、真心を捧げて朝廷に仕えていたのですが、**道鏡**の心に逆らったためでした。

しかし、**清麻呂**のために、**道鏡**の身の程を知らぬ望みが全く挫けて、万世一系の皇統に疵がつかなかったのは、まことに、此の上もなくめでたい事でありました。

道鏡の末路

しかし**道鏡**は、その後も天皇のご信任をよい事にして、わがままな行いを続けていた。　間もなく**称徳天皇**がお崩れになって、第 49 代**光仁天皇**がお立ちになると、**光仁天皇**は、前々から彼の無道を憎んでおられたので、直ぐに下野の国（栃木県）に遂いやって、造薬師寺別当という低い役に下げられた。　また、大宰府の主神の**習宜阿曾麻呂**は、遠く種子島の島守となされた。

道鏡は、その後二年経たないうちに下野で死にましたが、普通の平民と同じようにして葬られた。嘗て太政大臣だの法王だのといって、立派な乗物に乗って宮中に出入りした者の葬式になぞ迚も思われなかったに違いありません。　まことに天罰は恐ろしいほどに覿面です。　彼の墓と称するものが、今も下野の薬師寺村の或る寺の境内にありますが、ただ土を高く盛り上げただけの塚でして、上に一本の大きな木が生えている外には、ほんのしるしに置かれた石がひとつ転がっているだけです。　全く墓ともいえないほどに浅猿しく荒れています。

清麻呂召還される

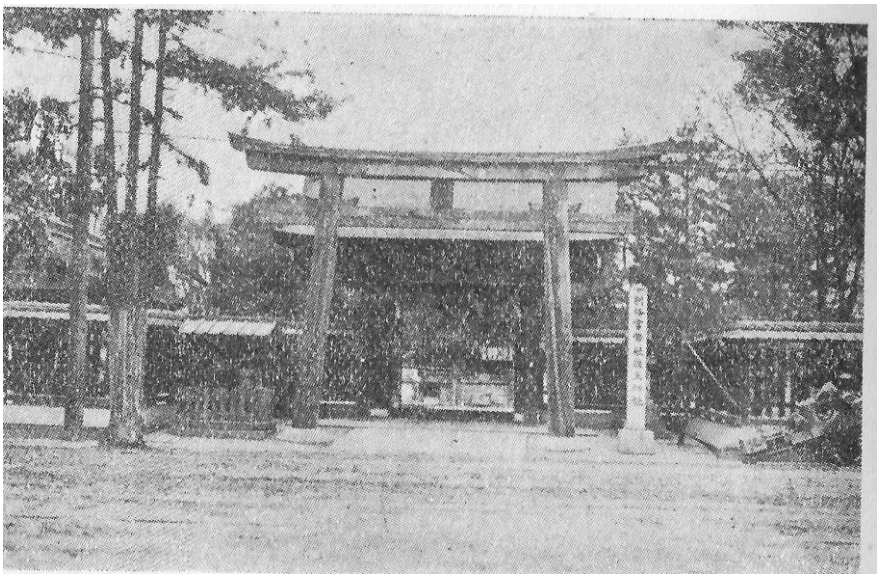
これに引きかえて、**清麻呂**のその後は実に光栄に満ちています。　道鏡らを遠くへ遂いやられた翌月、**光仁天皇**は**清麻呂**を都に召還されて、名も位も元の通りに復された。　彼はいよいよ忠義を尽くして、官も位も次第に進んだが、殊に第 50 代**桓武天皇**の御代に、都を平安に遷された時には、大功を樹てて、位は従三位に進み、官は民部太輔に中宮太夫を兼ねるに至った。

かくて延暦 18 年二月、67 歳を以ってその忠義の一生を安らかに終わりました。

そしてその時、**桓武**天皇は特にその死を悼んで正三位を贈られました。　**道鏡**が道に外れた望みを起こした時に、若し彼がいなかったならば、或いはわが国体に疵がついたかも知れなかったのです。

彼は実に一身の危うきを忘れて、国家のためにわが皇室の尊厳を護ったのです。　それがために彼れは後に護王大明神と崇められて、京都の別格官幣社護王神社に祀られて、正一位を贈られています。

その上、戦前の十円紙幣に**清麻呂**の肖像と護王神社の景とが載せられていますが、これは百円紙幣に**聖徳太子**と法隆寺とが載せられ、五円紙幣に**菅原道真**と北野神社とが載せられ、一円紙幣に**竹内宿禰**が載せられているのとすべて同じ意味で、わが国民が永くこれらの忠臣の精神と功績とを忘れないようにするためであります。



京都　　護　王　神　社

和気広蟲

清麻呂が召還された時に、姉の**広蟲**も召還されて、再び朝廷に仕えたが、その頃、この**広蟲**くらい情け深く、まごころに富んだものはなかったといわれています。　嘗て、**押勝**の乱の後に、世の中が非常な飢饉で、食るに困る人々の中に子を棄てる者の多かった時に、この**広蟲**の**法均尼**は、いちいちそれをひろい集めて育てましたが、その数は83人に及んだということです。　**桓武天皇**の御代には正四位に進み、典侍という役となったが、**清麻呂**の亡くなった延暦18年に70歳を以ってこの世を終えました。

後に**淳和天皇**から正三位を贈られ、今は護王神社に**清麻呂**と合せ祀られています。　女子で別格官幣社に祀られているのはこの**広蟲**一人です。　これは弟の**清麻呂**が宇佐に使いした時に、蔭となり日向となって彼を扶けて、かの大忠節を尽くさせたからです。　**道鏡**の末路と考え合わせてみるとよいです。

（第２５話　和気清麻呂　終わり。　次は一旦前頁に戻り、　第２６話　平安奠都　へ）